［フォーラム：アジア地域の研究と地理教育］

北京に住まう人々の生活空間と暮らし

松　村　嘉　久

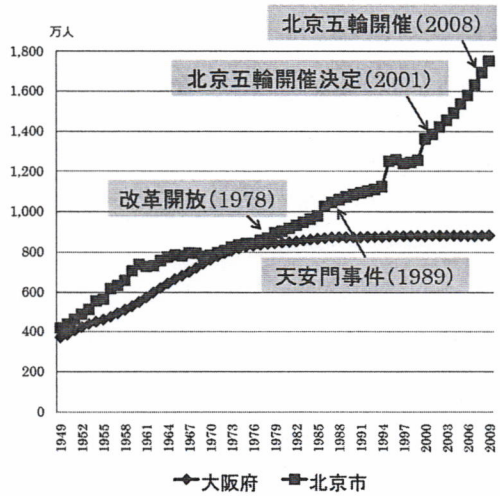
I　北京に住まう人々

中国の首都・北京は，面積1.64万平方 km に人口1,755万人（2009年）を擁するアジア有数の国際都市である。北京の都市構造は，故宮を中心として，環状道路が同心円状に幾重にもとり囲む形で，とてもわかりやすい。世界遺産の故宮から天壇の一帯が CBD であり，首都功能核心区と名付けられている（第１表参照）。その外側，第５環状道路（以下，５環という具合に略す）くらいまでが，城市功能拡展区と呼ばれ，人口密度の高い市街地である。このさらに外側にも市街地が急速にできつつあるが，基本的には農村と山林が広がる。首都功能核心区と城市功能拡展区を合わせた地域が，北京の都市域（面積1,368平方 km・人口1,080万人）であり，少々乱暴であるが，大阪府（面積1,898平方 km・人口884万人）と同じくらいの規模となる。

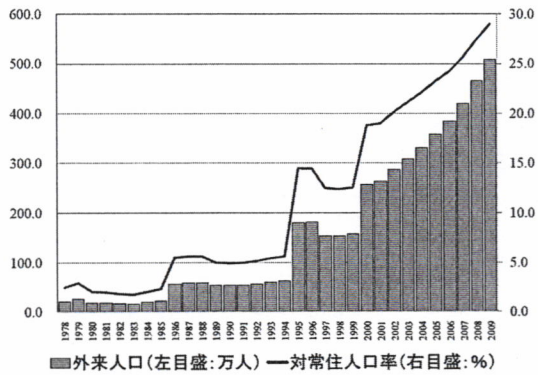
北京市と大阪府の人口推移を比較すると，鄧小平が改革開放へと舵を切った1978年以降，大きく差が開く（第１図参照）。1978年を１とするなら，2009年の大阪府は1.05倍で横ばい，北京市は2.01倍に急増している。毛沢東時代の中国では，戸籍制度と食料配給制度を駆使して，農村から都市へ人口移動を厳しく抑制してきた。北京ではいわゆる一人っ子政策が厳しく適用されているため，人口の自然増は中国のなかでも低い。改革開放からの約30年間，北京に人口増をもたらしたのは，他地域から北京市へ流入してきた人々であった。こうした人々の地域間移動は1980年代，制御したいが制御しきれないやっかいな存在と認識され，「盲流」現象と呼ばれた。1990年代に入ると，世界の工場の労働者として積極的に評価され，「民工潮」現象と呼ばれるようになり，農村と都市を隔てた「見えない壁」は，事実上崩壊した。

民工は農民工ともいわれ，農村からの出稼ぎ労働者という意味である。珠江デルタや長江デルタの諸都市に流入した民工は，世界の工場を支える製造業へと向かい，工場が提供する寮や宿舎などがその居住の受け皿となった。製造業が弱く消費都市の性格が強い北京は，こうした受け皿が少なく，民工たちは老朽化した市街地や近郊農村の借家に住まい，サービス業や建設業で仕事を求めた。

第２図に北京市の外来人口の動向を示した。外来人口とは，北京に戸籍は無いが，半年以上居住する人た



第１図　大阪府と北京市の人口推移（1949-2009年）



第２図　北京市の外来人口の動向（1978-2009年）
資料：北京市統計局（http://www.bjstats. gov）より。

第1表 北京市の地区別の人口統計（2009年）

地　区	常住人口	外来人口	比率(%)	戸籍人口	暫住人口
東城区	56.3	12.0	21.3	62.1	12.5
西城区	68.1	13.1	19.2	79.3	11.9
崇文区	30.2	5.8	19.2	33.5	8.5
宣武区	56.5	12.5	22.1	53.7	14.4
首都功能核心区	211.1	43.4	20.6	228.7	47.3
朝陽区	317.9	105.6	33.2	185.3	222.0
豊台区	182.3	52.5	28.8	105.2	108.9
石景山区	60.5	21.5	35.5	36.0	19.9
海淀区	308.2	100.1	32.5	215.8	156.1
城市功能拡展区	868.9	279.7	32.2	542.2	506.9
房山区	91.2	15.0	16.4	76.7	19.9
通州区	109.3	39.9	36.5	65.6	59.6
順義区	73.2	15.3	20.9	57.8	27.0
昌平区	102.1	39.5	38.7	52.3	89.5
大興区	115.9	51.3	44.3	59.3	93.6
城市発展新区	491.7	161.0	32.7	311.7	289.6
門頭溝区	28.0	3.8	13.6	24.4	7.9
懐柔区	38.0	10.6	27.9	27.8	9.5
平谷区	42.7	3.3	7.7	39.8	4.4
密雲県	45.8	4.8	10.5	43.1	6.0
延慶県	28.8	2.6	9.0	28.1	3.3
生態涵養発展区	183.3	25.1	13.7	163.2	31.1
総計	1,755.0	509.2	29.0	1,245.8	874.9

注：単位は万人。比率（%）は常住人口に占める外来人口の割合。
資料：北京市統計局（http://www.bjstats.gov）より。

ちであり，出稼ぎというよりも，むしろ移住者に近い人たちと考えてよい。この図からは，北京五輪誘致と外来人口の動向との相関が読み取れる。2000年ミレニアム五輪の誘致を目指した北京は，外来人口の流入を制御していた。1993年にシドニーとの招致競争で惜敗すると，1994年に民工を受け入れる地方法規を整え，2004年五輪への立候補を早々にあきらめ，国家の威信をかけて，2008年五輪の誘致に照準を合わせ，外来人口を積極的に受入れて，都市改造に踏み出した。天安門事件10周年や，五輪関係者の視察の相次ぐ1990年代後半は，外来人口の流入を再び抑制する。その後，2008年北京五輪開催が確実となった21世紀に入ると，再び外来人口の流入に拍車がかかる。

第1表は地区別に北京市の2009年の主要な人口統計を示したものである。最近では北京市民10名のうち3名が外来人口，暫住人口（北京に来て3日以上経た者に登録義務あり）で見るなら，ほぼ半数にもなる。北京市民の日常生活は，もはや外来者の就労抜きには成り立たない。都市域のサービス業就業者に限定するならば，その大半が北京以外の人たちであり，筆者は「北京から北京語が消えた」と錯覚したほどである。この他に，首都功能核心区では，常住人口よりも戸籍人口の方が多い傾向がある。これは戸籍所在地と現住所が異なる「人戸分離」であり，老朽化したCBD住民たちが，戸籍を残したまま他所へ転出している実態が浮かびあがる。そこに暫住人口が入り込み，インナーシティの荒廃が進む。城市功能拡展区や都市発展新区では，外来人口や暫住人口の絶対数も多く比率も高い。

II 「美しい北京」の創造と「醜い問題地域」の発見

北京五輪誘致と絡み，北京はとりわけ21世紀に入り，まるで三倍速のビデオを見るような勢いで，空間変容を遂げていく。契機となったのは，二つの出来事である。ひとつは，2001年の2008年北京五輪開催決定とその後の関連インフラ整備の開始である。もう一つは，2002年末から2003年にかけての北京でのSARS禍である。2008年北京五輪開催に向けて，「美しい北京」を創造すべく，本格的に動き出したまさにその頃，北京でSARSパニックが起こり，突然かつ必然的に，スラムやインナーシティが「醜い問題地域」として立ち現われた。五輪を成功させるためには，より多くの外来労働者たちを受け入れざるを得ない。しかしながらその一方で，「美しい北京」を創造するため，外来者やその住まう空間も，排除の対象となってゆく。

そもそも，北京のスラムの多くは，五輪誘致と絡んで形成されてきた。ミレニアム五輪に立候補表明した1990年初頭，北京市内各地で五輪関連施設を建設する青写真は，すでに出来あがっていた。その時点で近い将来，日本よりも遙かに強固な国家権力によって，土地収用される運命は決まった。それに先行して，その土地利用に様々な制約が課せられ，失地農民が生まれた。2004年五輪への立候補を断念して，2008年誘致に全力を注ぐ決定がなされて，土地収用の執行猶予は，近い将来から，かなり後の話へと後退した。また，五輪誘致で「環境」が問題になると，市街地近郊の郷鎮企業や工場も，五輪開催に先行して，強引に閉鎖に追い込まれた。かくして，北京市内のあちらこちらに，将来必ず収用される運命にあるが，補償金の支払いは執行されず，不動産バブルが沸きたつなか，凍りつか

さざるを得ない土地が生じた。

このような事情のもと，土地から収入を生み出せなくなった農村や工場・倉庫の跡地では，土地使用権保有者たちが将来壊されることを見こして，生活インフラ整備も不充分なまま劣悪な住宅を競うように建て，外来の労働者たちを賃貸入居者として呼び込んだ。北京市政府も当初はその状況を容認していた。しかしながら，SARS禍を経て，五輪関連のインフラや施設の建設が具体化するにつれ，臓乱差（汚く乱雑で劣悪）な空間，中国では特に「城中村」と呼ばれるスラムやインナーシティのクリアランス計画が，2005年からの3年計画で走り始める。つまるところ，北京五輪の開催に向けて，「美しい北京」の創造を試みるなか，「醜い問題地域」が撤去・再開発の対象として立ち現われ，空間的リストラクチャリングが急展開していく。その過程において，出稼ぎ労働者や移住者たちの北京市街地での生存空間は急速に狭まり，その居住はより郊外へと追いやられ，疎外感や絶望感が高まった。

III　スラム・インナーシティのクリアランスの諸相

北京には，跡かたもなく消し去られた場所がいくつも存在する。例えば，地方でのもめごとを直訴する人々が生活した通称・直訴村は，北京南站の建設にともない消滅した。ウイグル族などが集住することで注目された新疆村もすでにない。天安門広場の南側，怪しげな美容院や土産物屋が立ち並び，「貧民窟」と呼ばれた大柵欄でも再開発が始まり，かつての魅力ある猥雑さはもう見出せない。ここでは，いくつかのクリアランスの実態を具体的に見ていきたい。

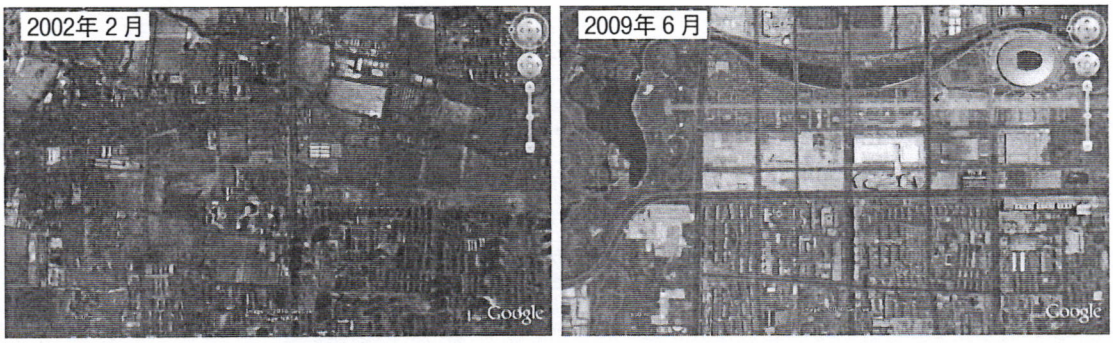
北京五輪のメインスタジアムとなった「鳥の巣」の北側，行政区でいうなら朝陽区洼里郷一帯は，最盛期で5万人を超える出稼ぎ労働者が生活していた。4環の外側，5環の内側に位置するこの一帯は，河南省出身者が多く，廃品回収で生計を立てる者が多いため，河南村や垃圾（ゴミ）村という通称で知られていた。村内には，出稼ぎ労働者の子弟が通う無認可小学校，河南の郷土料理を提供するレストラン，露天の市場，資源ゴミの売買・集積所などがあった。道路は舗装されておらず，電気は通っていたが，食事の準備は戸外の七輪で行い，トイレも共同，水道も共同で井戸水を使用する，という生活空間であった。

河南村のクリアランスは2003年の夏から年末にかけて完遂され，翌2004年から「鳥の巣」や「立方体」の基礎工事が本格的に始まる。Google Earth の衛星画像を比較した第3図からは，その空間変容のすさまじさが見える。一般に，中国の用地買収では，土地が収用されるか着工されるタイミングで，土地使用権保有者に対して，代替の土地使用権か補償金が与えられる。土地の賃貸契約者に対する補償は，基本的に無い。もともと一帯に住んでいた失地農民は，土地収用が決定された1990年代初頭から，収用されるまでの10年余り，出稼ぎ労働者たちの払う家賃が収入源となった。五輪関連の建設で，出稼ぎ労働者たちは追い出され四散した。

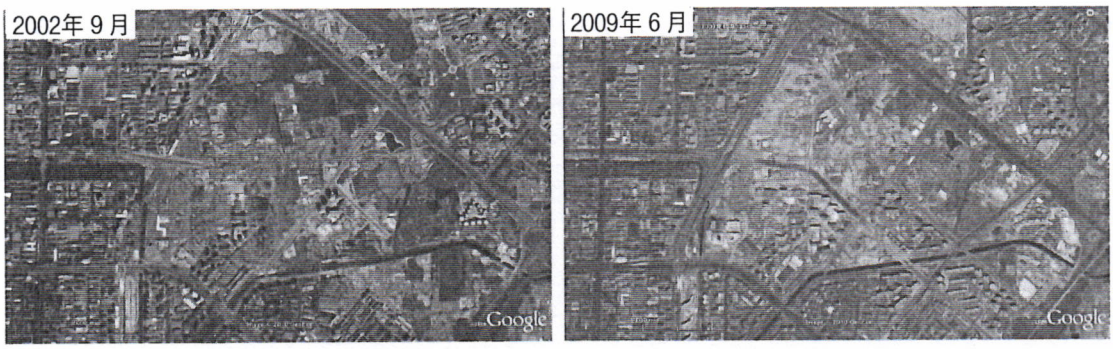
朝陽区太陽宮村では地下鉄10号・13号線が建設され，「緑化隔離帯」が形成されると決まったが，補償金も出ず収用もされないまま，長らく計画は凍結された。3環の外側で4環の内側に位置する太陽宮村は，もともと豊かな近郊農村であったが，その住民たちは失地農民となり，出稼ぎ労働者向けの賃貸経営に走る。結果として，2002年頃には，北京でも最大級のスラムとなったが，2007年末から翌春にかけてクリアランスされた（第4図参照）。現在では，交通至便で緑溢れる高級な居住空間へと生まれ変わりつつある。

3環内側に残るほぼ唯一の大規模スラムの朝陽区弘善寺も，2006年2月から撤去が行われ，現在は大規模な高層集合住宅街が建設されている。弘善寺のクリアランスは，インナーシティの再開発と絡む事例として注目される。天壇公園から北にのびる祈年大街の東西両側は，清朝から残る老朽化の著しい一帯であり，安い家賃の相部屋で暫住人口を魅惑していた。崇文区に属するこのインナーシティの再開発が，2008年2月から始まり，ここの土地使用権保有者に対する代替住宅として，直線距離で5kmほどしか離れていない弘善寺スラムの新築住宅が提示された。代替住宅でなく金銭補償を求める者もいたが，移転に応じた者も多い。家賃収入を唯一の生活の糧としていた高齢者のなかには，立ち退きを強く拒む者もいたが，撤去計画は強行された。

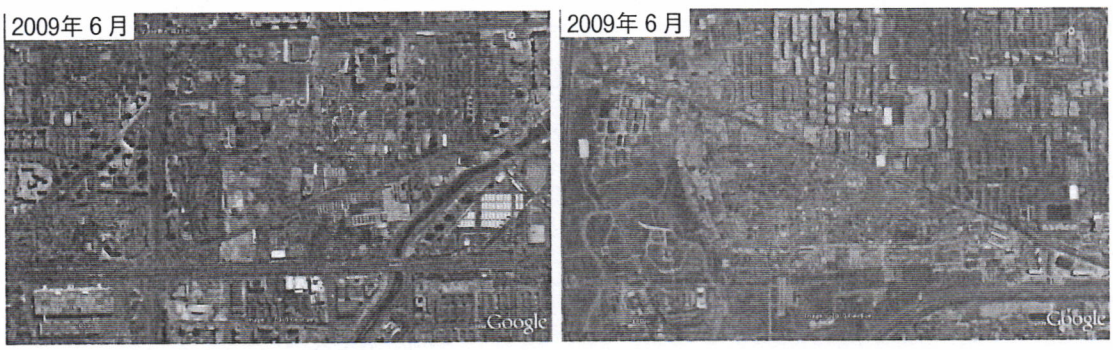
繊維製品の卸売市場が並び，零細な服飾工場が集積する豊台区の通称・浙江村は，4環内側に残る数少ないスラムであったが，2010年春から再開発が始まった（第5図参照）。4環外側，5環内側に立地する海淀区の八家村は，精華大学が宿舎などの建設のため土地収



第3図　北京五輪のメインスタジアム北側の空間変容（2002年2月から2009年6月）
資料：Google Earth の衛星画像より。



第4図　太陽宮村の空間変容（2002年9月から2009年6月）
資料：Google Earth の衛星画像より。



浙江村の現状（2009年6月）　　八家村の現状（2009年6月）

第5図　北京市の浙江村と八家村の現状
資料：Google Earth の衛星画像より。

用を決めたものの，そのまま放置されスラム化したが，ここでも2010年9月から撤去が始まった。

IV　おわりにかえて

驚異的な成長を遂げ続けている中国，その首都・北京に住まう人々の生活空間と暮らしは，平均的な像としてなかなか描き難い。貧富の格差が拡大するなか，北京の市街地では，門衛付きの超高層・超高級マンションが建つ地域に隣接して，劣悪な生活インフラの低層住宅街が広がり，富裕層と貧困層とのコントラストは強烈である。北京の外来人口は，出稼ぎ労働者というよりも，事実上の移住者であり，近い将来，北京市民として受け入れなければならない日が来る。投資というより投機で沸く北京の不動産バブルは，北京五輪

後もおさまらず，住まわれることなく老朽化していく高級住宅も多い。しかしながら，現在の北京に必要なのは，安価で良質な住宅であろう。最近ようやく，公営住宅に相当する「公租房」や，立ち退き対策用の「安置房」などが注目されつつある。出稼ぎ労働者を都市住民としてどのようにとり込み，どのように中間層へと育てていくのか，北京ならず中国の諸都市が抱える共通の課題である。　（阪南大学国際観光学部）

参考文献

松村嘉久「北京オリンピックと都市空間の変容―インナーシティとスラムのクリアランス―」『地理』635号，2008年，40-51頁。